

數論哲學における我慢について

足　立　修

數論學派 (Sākhya) に於ける世界開展の仕方は、その歴史に於て常に一定して居たものではなく、今問題としようとする我慢 (ahankāra) の原理も我慢から生ずる唯 (tannātra) の原理同様後世新しく付け加えられたものと云われているが、それはさておき、ここでは我慢の性格を少しく明らかにして見よう。

數論に依れば、自性 (prakṛti) から最初に覺 (Buddhi) が轉變するが、此の覺も sattva, rajas, tamas なる三徳所成のものであり無知である。觀照者なる神我の側から見れば覺は神我の觀照の道具にすぎないから、Sākhya-Kārika でも内作具 (antah-karana) の中に入れて⁽¹⁾いる。覺は神我なしには活動することは出来ないが、兩者は全く性質の違つたものと數論は見ている。覺が知的な働をしてゐることは、その働に即して神我の觀る働があるからだという眞實の姿を我々は知らないから、覺それ自體で知的な働をしてゐるのだと考えて自我の觀念を持つことになるのであつて、ここに我慢が起るのである。無知なる我慢は神我と全く性質の異なるものではあるが、兩者は相即して働いてゐるのであつて、我慢が轉變することが出来るのは神我の觀照があるからである。數論は自性側の我慢を考へる場合、常に神我と相對立せしめ神我との交渉の上で見ている。

我慢を性質的に見てみるに、自性から最初に轉變する覺の三徳の

中 sattva が増大すれば變異我慢 (vaikṛta-ahankāra) を生じ、之より五知根五作根、意の十一根を生じ、tamas が増大すれば大初我慢 (bhūtādī-ahankāra) を生じ、五唯五大を生ずる。そして rajas が増大すればそこに焰熾我慢 (tājjast-ahankāra) を生じ、之は自分自ら作用するということではなく、先の二つの我慢の伴侶となつて一方では十一根、他方では五唯五大を生ずるとな⁽²⁾じてゐる。之等三我慢は勿論我慢の三つの方面を指しているのであるが、それより轉變する各變異を生ずるのに、前述の如く各々擔當が異なるところから判斷すれば三我慢と見ることも出来よう。又覺慢心、根は如何にして起り又働くかというに、之には已見の場合と未見の場合の二つの場合が考えられている。そして已見の場合には一時に起る時と次第に起る時との二つがあげられ、一時に起る時とは、色を見れば一時に覺慢心と眼根と俱に起つて色境を取る様な場合で、之は他の九根の場合も同様である。次第に起る時とは、人が路を歩いていて高いものを見てそれが人であるか杭であるかと疑いを持ちそこに鳥等がとまれば杭であると知る様な場合である。他方未見の場合には、根に依つて次第に起るのであつて、邪見邪行によつて佛法僧なる三法を誹謗してゐる人でも、先ず外根である耳根に依つて次第に三法を起す如きであるとしてゐる。之等は凡て自性の轉變の姿に外ならないが、數論に於ては、自性は一度轉變し始めれば中途で止るようなことはなく、必ず二十四諦となる迄進むのである。

我々の認識について考えて見るに、知覺が先ず我慢に傳つて自分が見たり聞いたりすると思ふように主體化せられ、凡てのことが自分を中心となされ、次にそれが覺に於て決斷的なものとなり、覺は一方に於ては之を神我の觀照に供し、又一方に於ては神我の觀

數論哲學における我慢について（足立）

照によつて我慢に命令を傳える。我慢はそれを自分のものにしうとして意を動かすから、意に欲望が成立し、作根の活動を起し作根をして對象界なる五大に働きを及ぼさせることになる。

本因たる自性とその變異なる我慢との關係は、ちようど水と波との關係であつて、三徳が合して我慢を生ずるが、その生じ方は父母が子供を生ずるような非轉變生ではなくて、水が波となるような轉變である。あたかも乳が變じて酪となるような轉變生であつて、變異は之即ち自性であるとしている。數論は覺以下の凡ての變異を一全體として之を自性と見るが、又どの變異も各々性質を異にする三徳の顯れ方の優劣によつて變異はその各々の性質を持つのであつて、構成要素に於ては自性と何等異なるものではないと見ている。

數論に於ける自性轉變の姿と云うものを見つみるに、それは自己を中心とした轉變の姿であつて、そこに於ては身體的な、肉體的な自己が中心となつてゐる。身體的な自己は對象認識的な自己であつて、それには先ず我慢が考えられなくてはならない。我慢は自己を作るといふような精神的な働きであるとしても、それは自己を作り出すことであると見てよからう。我慢は精神的作用をなすものであることは覺と同じであつて、我執（abhimana）と定義せられてゐる。「我が聲、我が觸、我が色、我が味、我が香、我が福德愛すべし、是くの如き我所の執を名づけて我慢となす」と云つてゐる如く、執着愛憎を起させるところのものであつて、自己中心の考えとなる基をなす機能である。そしてこの我慢に基いて、覺が「予が之をなさねばならぬ」と決意するのだとしている。

又、數論は人格の主體ともいふべき細身の存在を主張している。父母所生身は死ねば壞滅を免れないが細身は恒常であるとされてい

る。細身は自性から最初の轉變が始つた時に生じ世界が再び本源に還る時機迄永續し、その間如何なるものにも侵入しうる特性をもつて輪廻するが、この細身が生死に輪轉していることは、自性が働いてゐることであり、これは即ち神我自性の兩元が交渉してゐることであつて、然も兩元交渉の中心となるものは覺を神我と同一視する我慢の働きであるから、細身と神我とを關係せしめ細身を輪廻せしめるのは我慢であるということが出来る。

細身が若し神我と我慢等とは異なるということを知れば輪廻をやめて解脱するが、之と反對に「我愛すべし」とか「憐むべし」とかいふのは我慢によつてゐるから、この狀態は無知と呼ばれる。無知とは樂苦痴を分別しえぬことであり、それを知らぬことである。我慢は我慢自身を知らぬから我慢である。かくの如き無知は單に全能でないといふ消極的なものに止らず質的には積極的に我執を特質とするところに此の無知の厄介な點があるわけである。樂苦痴を分別し知るには樂苦痴の立場を超越しなくてはならない。我慢が自己自身を自覺するには、我慢自身の立場を超越しなくてはならない。即ち神我の立場に立つて初めて自覺されるのである。此の場合自覺させるものは觀照者なる神我であり自覺するのは覺であると云うことが出来ると思う。神我自性の區別智を得た覺の智によつて神我と我慢が共に自覺され、我慢の真相がわかり我慢としての性格を失うわけであるが、我執を本性とする我慢を制御するのは矢張り覺の智の下における我慢の性格を失つた我慢であつて、覺は我慢を制御する力はなく、只我慢のあり方を示すのみであると考えてよからう。

1 數論偈三三。2 數論偈二五。3 金七十論三十偈。

4 數論偈一六。5 金七十論二十。6 數論偈二四。